

素直クールなダネルさん

ハテギツネ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

素直クール？ 素直狂うだよ。

目次

素直狂うなダネルさん

—
1

素直狂うなダネルさん

「指揮官、私と結婚しよう」

朝の執務室はNTW—20・・・通称、ダネルのそんな言葉とともに嵐に包まれそうになる。

今日の副官で隣で書類作成していたWA2000はその言葉を聞いて作成途中の書類に派手にインクをぶち撒け「!?・・・、!?」と声にならない声を出すし、先に任務完了の報告をしていたUMP9は言葉には出さないが目が点になっている。

対して言われた方の男・・・指揮官は表情を動かすことはなくたった今作成した書類に目を通していた。そのまま口を開く。

「ダネル・・・昨日も言ったはずだ。誓約装備一式はコストが高くて今の俺達じゃ手が出せない代物だって」

「そっちではない。・・・いや、誓約もしたいが私が言っているのはそっちではなく、婚姻を結ぶ方の結婚のことだ。私は貴方が好きだ」

ダネルのその言葉にUMP9が小さく「おお・・・」と声を出し、WA2000の

座る方からガタツ、と椅子が鳴る音がする。

指揮官はその言葉に小さく嘆息を零す。

「あんなダネル、いつも言ってるだろ。それは無理だって。俺は人間で、お前は人形なの。人間同士がする結婚は無理なんだって」

「たかが種族の違いだろう。問題は無いはずだ」

「いや大有りだからな？」

そこまで言うとはダネルは「むう」と唸ってしまふ。

やれやれ、ようやく諦めてくれたかと一息つく指揮官。

「わかった。では結婚は諦めよう。ならば指揮官、私と子づく「言わせねえよ!!」」

その先を言うのはやめろお！ 倫理^Rコード¹⁸に引っかけかっちゃうでしようがあ！ 公

衆の面前でいう言葉じゃないわ！ 驚いて出来上がった書類破いてしまったわどうし

てくれるん?!? というか自律人形ってそういうことって可能なの!? もしそうなら

凄えなI.O.P! なんてそんな予想の斜め上の発想しか出来ないの!? 面妖な変

態技術者しかいないの!? わーちゃんは赤面しながら目の前で拳作らないで! U

MP9は顔赤らめてないでわーちゃんを止めて!? なんだドルフロ赤面部はここです

か!!?

「ただいまー、無事戻ったわよー・・・って、ナニコレ? どういう・・・あー、そゆこ

と」

阿鼻叫喚となった指令室を見て、遠征任務を終えて戻ってきたM i c r o U z iは全てを察し、ハア、とため息をついたのだった。

「はあく．．．酷い目にあった．．．」

仕事がある程度終わった指揮官は休憩と気分転換を兼ねて、基地内にある室内庭園へと向かった。

そして庭園内のベンチに腰掛け、クソでかいたため息をつく。

あの子の数十分の口先攻防戦の結果は、最後は指令室に來たU z iにすべて投げつけるという行為により、指揮官側の勝利(?)で終わった。

U z iはしぶしぶといった形でダネルを部屋から引つ張り出していき、一息ついたかと思えば

『ヒューヒュー、熱いねえ指揮官!』

『あああアンタ!? どぞぞおd d dどおういことよあれは!』

とUMP9にかわれるわ、WA2000に胸倉をつかまれるわでほとほと参った。おかげで今日の業務は胃薬を抱えながらの仕事となりそうだ。

「仕方ないのではないか？ UMP9とWA2000は最近ここに来たばかりだろう？」

うん、そうだな。ここでの『恒例行事』知らなくて当たり前よね。

ていうかわーちゃん、詰め寄るならせめて手についたインクを拭いてからにしようなって話だ・・・おかげで襟元に手形がデカデカと写されちまったよ。

「問題ない。そう思っつてここに新しい制服を用意しておいた。クリーニング済みだぞ」

お、気が利くじゃないですか。では後で着替えておきましょうか。ここじゃ何ですしね。

「？ 別にここで着替えても大丈夫だと思うのだが？ ここには今私と指揮官しかいないぞ？」

「それが問題なんですよ、なんでここにいるのダネルさん!？」

気が付いたらベンチの隣にダネルが座っていた。ちよつとまでお前いつからいた!?

直前まで気配全然感じなかったぞ。つか朝にUziが連れて行ったハズでは!?

「何を言っている指揮官。今は昼だぞ。当の数時間前に解放されている」

「え・・・？ あ、そ、そうなの？」

庭園内の設置時計を見る。・・・もうお昼を回っていた。マジか。まだお腹空かないからそんなに時間経ってないものだと思っていた。

「それよりもだ、指揮官。朝の答え再考してくれたか？」

ダネルはズイイ、と顔をこちらに寄せてくる。

「いや。再考も何も変わりません。お断りです」

「むう。そうか・・・しかし、なぜだ？ なぜそう頑なに拒むんだ？ 理由を教えてください」

「えないか」

俺の返事にシユン、となつてしまふダネル。

・・・コイツ本当にその理由に気が付いてないのか？

「理由も何も、お前は俺の事どう思ってるのさ」

「もちろん大好きだ。毎日言っているじゃないか」

「ああそうだね。俺が5歳の頃からそう言ってるよね。もういい加減ギャグだつて分かってるからやめてほしいんだけど」

・・・要はそういうことだ。

実はこのダネルという戦術人形、元々は俺がG&a m p・Kに入る前の実家で購入・使用していた民生人形だった過去がある。

世間が第3次世界大戦が始まったと騒いでいた頃。親父が徴兵されて戦場へ行つて、女手一つで生まれたばかりの俺を育てていくことになった母は相当な苦勞を強いられていたらしい。

そんな中でそんな母を見て不憫に思った金持ちおせっかい好きの一人が母に一体の人形を送つたらしい。

それがダネルだった。

以来、俺とダネルは一見年の離れた姉弟、もしくは幼馴染という感じで過ごしていったのである。

そしてこいつは俺が物心つき始めるその時から、事あるごとに俺への告白をしてきているのだ。

最初の方はまあ、きれいな人から告白されたつてことだから恥ずかしくはあつたし、子供ながらにどぎまぎもしていた。だがそれも毎日言われ続ければ、ダネルのことを家族の一員として完全に意識している頃にはそれには物応じしない男になっていたというわけだ。

要は、挨拶のようなモノ。彼女の告白はそういうモノだと思ふようになったのだ。

で、そのまま時が流れていって、第3次世界大戦は終わり、親父は戻つてこず、母に少しでも樂をさせるために勉強して、そんなことをしなくていいといと洩る家族の元を

離れ、見事就職に失敗。そこから色々と流れ着いて、気が付けばG & a m p ; Kの指揮官候補生になっていて。

・・・そうして指揮官になったら、いつの間にか戦術人形へ様変わりしていたコイツと出会って・・・朝のような状態が毎日続くということに至るのである。

「ギャグなものか！ 私は本気だぞリナト！・・・あつ、し、指揮官」

勢い余って俺の本名を口にしてハツとするダネル。

俺はその様子に少しだけ笑ってしまう。

「別にいいよ。ここには今俺とお前しかいないんだろ、姉さん」

「！、・・・そうだな。ああ、そうだったな。リナト」

そう言つて少し顔をそむけるようにして帽子の直すダネル——もとい、姉さん。若干頬も赤い気がする。

普段はスツパリとモノを言うのに、こういうところは恥ずかしがるとは。なんだかなあ。

「・・・姉さんが俺を好いてくれるのは嬉しいよ。でも俺はこの指揮官で、それ以前に・・・その、姉さんは俺の姉さんでもあるんだ。だから姉さんと結婚するっていうの

は、その、な、分かるだろ?」

「・・・いや、分からない。おかしいことなのか?」

ダネルは指揮官の言葉に首をかしげる。

・・・何でそういうところはポンコツなのよ畜生。ああでも俺も口に出せないのがつらい。なんて説明すればいいんだ畜生。

「ああもう、とにかく駄目なの! 姉弟で結婚とか! お母さんが許しません!!」

「?」 元ご主人 母さんのことか? それならもう貰ってはいるのだが」

言葉の綾つてやつだよちよと待て今重大なこと言わなかつたこの子?

「と、そうだ。そういうえば渡すものがあるんだ」

「え、なにいきなり・・・渡すもの? 告白の続きのためだけに来たのではなく?」

「それだけではない、いや、そっちも諦めてはいないが・・・いやそうじゃなくてだな」

そこで姉さんが腰につけていたポーチから何かを取り出し、俺の前に持つてくる。

・・・なんだろう。片手で持てるぐらいの大きさの箱みたいだが。

「リナト。今日が何の日か覚えてるか」

とそこで姉さんが急に話題を振ってくる。

今日? 今日のは確か・・・2月14日。世間では確かこの日は。

「・・・え? まさか」

「開けてみてくれ」

言われるがまま、その箱の包みを開いてみる。・・・この香りは、まさか。

「ハッピーバレンタイン、というやつだ」

中には一口大にかたどった形のチョコレートが六つ並んで入っていた。

「これって・・・」

「菓子作りに関してはあまりやったことが無いから、味は変かもしれない。でも・・・食べてくれると、嬉しい」

・・・驚いた。あのダネルが、姉さんがバレンタインチョコを作ってくるだなんて。

いや、確かに民生人形時代は家でメイド紛いのことはしていた記憶はあるし、料理を作っているところを見たこともあるが。

「・・・姉さんが何かを作ってプレゼントするなんて」

「むう、私はそこまで薄情な奴に見られていたのか？」

「いや、姉さんは確かこういう行事には興味を持たなかったでしょ？ 新鮮だなんて」

「ん、まあ、確かにそうだな・・・こんなことしたくなかったしな・・・」

「え？ 最後なんだって？」

「ん、いや、なんでもない・・・それより、食べては、貰えないだろうか」

え、今？ まあ、ちょうど姉さんと話していたら小腹もすいてきたし、ちょうどいい

か。

指揮官は入っていたたチョコレートの一つをつまんで口に頬張る。

「うん、甘くておい……し……」

その時だった。

急に舌に痺れるような感覚が走ったかと同時に、足に、いや、体全体に力が入らなくなった。

崩れ落ちる体。その体をダネルが抱き留める。

「どうした？ 眠くなったのか？」

ダネルの声色は変わらない。が、その一瞬見えた表情で確信する。

「おま、なにを、入れ……!？」

「何、ちよつとの間だけ力が抜ける薬さ。大丈夫、人体に後遺症は与えない」

「な、ん、だと……!？」

「……お前がいけないんだぞ、リナト」

ダネルの指揮官を抱き留める腕に、力がかかる。

「民生人形の時からお前のことが好きだった。信じてはもらえないだろうが、一目惚れ、というやつだ。おかしいか？　おかしいだろうな。その時はまだお前は5歳になったばかりの子供だったというのにな．．．でも、その時から好きなんだ」

「お前が成長していった後も、私はお前のことが好きだった．．．お前が就職のために家を出るといった時は焦った。お前が隣にいない生き方なんて考えられなかった．．．あんまりじゃないか。あれだけ離れたくないと言ったのに。あれだけ好意を伝えたのに。答えもないがしろにして去っていくなんて」

「お前が家にいない日々を何度過ごしたんだろうな。私のこの思いはどんどん膨れて、焦がれていって．．．耐えきれなくて」

「．．．お前がG & amp; Kに入ったと聞いて、真っ先に行動した。母ご主人さんに許可もいっただいて、戦術人形になって、真っ先にお前の下に配属されるように根回しをした．．．そして、お前と再会して。もう二度と離れたくないと思った」

熱い吐息が指揮官の耳元をそよぐ。

「言っただろう？　私は本気だと。正直こんな方法は使いたくなかったんだが．．．私は私の思いを抑えることがもう、出来ないんだ。壊れてしまったんだ。リナトのことが今でも大好きで、リナトのことがたまらなく愛おしくて．．．こらえられないんだ．．．ハハッ、お姉さん失格だな」

ダネルの顔が指揮官の前に寄せられる。

それは指揮官も今まで見たことが無い、民生人形の頃だつてしなかつたダネルの、涙を浮かべながらも情欲めいた顔がそこにあつた。

「今夜は寝かせないからな、リナト」

・・・それ、女の子が言うセリフじゃないと思う。

口を開けられないでいた指揮官は、なんとかそれだけを思うと、その後に意識を落としました。

・・・その後、指揮官は大人への階段を上つたんだとか、そうでもないとか。